

“舞踊学にとってアーカイブスとは何か？”：フォーラム総括報告

貫 成 人

第一回「舞踊学フォーラム」は、6月12日（日曜日）13時半から16時半まで、池袋の東京芸術劇場地下2階リハーサル室でおこなわれ、聴衆は、会員42名、非会員25名、計67名であった。

舞踊学フォーラムは今回新たに発足した企画である。従来、「舞踊学会大会」とは別に年二回の「定例研究会（例会）」が3月と6月に開催されていたが、理事会・常任理事会での数年にわたる検討の結果、大会以外の企画は年一回とし、研究発表中心の「例会」と「フォーラム」をあわせて開催することになった。フォーラムの目的は、舞踊学会らしく、かつ、学会外にも開かれた企画を実行する点にある。テーマは「舞踊学にとってのアーカイブス」とされた。

「アーカイブ(archive)」「アーカイブズ(archives)」は多義的な言葉であり、第一に、保存された記録や文書、第二に、それを保管する場所、第三に、保存する行為のことを指す。通常、その対象となるのは、文献や草稿、古文書などの文書資料だが、舞踊の場合、作品制作ノートや舞踊譜などのほか、映像資料、公演で用いられた衣装や小道具、舞台装置図、さらに、伝承・保存された身体技法や復元された上演作品そのものなどもまた含まれる。

舞踊学会は、バレエや日本舞踊、盆踊りなどの古典・民俗・民族舞踊からモダンダンス、ポスト・モダンダンス、コンテンポラリーダンスにいたる膨大な地域と時期、また、舞踊教育から、歴史や美学、文化人類学にいたる多様な方法論にわたる研究分野をカバーしているため、一口に「アーカイブス」と言っても、さまざまな切り口が可能である。その中から今回、選ばれたのは、バレエと日本伝統芸能、舞踏、そして日本モダンダンスであった。

第一部「古典舞踊とアーカイブス」(13:30～14:40)では、舞踊における保存資料の多様性とその先端性が早くも明らかになった。バレエリュス関連資料を主たる対象とした薄井憲二バレエコレクションには、当時の舞台衣装やポスター、プログラムなどがふくまれ(舞踊研究家芳賀直子氏「薄井憲二バレエコレクションとアーカイブス」)、国立劇場伝統芸能情報館は、通常の文字・物質資料のほか、映像などをデジタル化、データベース化して保存運用しているという(国立劇場顧問織田紘二氏「国立劇場伝統芸能情報館とアーカイブス」)。

アーカイブスの保存対象には身体やその技法も

含まれるが、フォーラム第二部「土方巽『舞踏ノート』を読み解く」(14:50～15:30)ではその一例が紹介された。舞踏研究ではつとに話題になっていた土方巽の「舞踏譜」は、現在、慶應義塾大学アートセンターにおいて保存研究されており(同センター研究員森下隆氏)、舞踏家栗由起夫氏による上演とレクチャーにおいて、舞踏譜に記された言葉やイメージがどのように現在の身体に実現されるのかが示された。

上記二つのセクションに関しては、制度や機構としてのアーカイブズがすでに存在していたが、その条件が必ずしもあらゆるジャンルで整えられているわけではない。第三部「近代舞踊とアーカイブス」(15:40～16:30)では、日本モダンダンスの創始者である石井漠の関連資料、ならびにその代表作とされる『山に登る』(1925年)の初演・復元の事情について、歴史の生き証人でもある舞踊家黒沢輝夫氏から、また、日本モダンダンス関連の映像資料について現代舞踊協会理事長若松美黄氏から報告があり、あわせて『山に登る』の試演があった(石井登、土屋麻美)。

全体を通じて、資料収集施設としてのアーカイブズの設置・運営上の諸問題が紹介され、舞踏譜からデジタル資料、さらに、身体技法や復元作品にいたる舞踊関連アーカイブズの多様性が示された。だが、舞踊学フォーラムの成果はそれだけではない。アーカイブは、収集する行為そのものを意味するのであった。「舞踊学とアーカイブス」は、さまざまなアーカイブズを一堂に集め、収集保存の受け皿が必ずしも整えられているわけではない原資料を公の場にもたらすことによって、舞踊研究の土台となる情報の透明性と流通性を高めるとともに、今後設けられるべきアーカイブズの礎を提供しうる企画であった。実際、たとえば、日本モダンダンス関連資料を保存することはわが国の研究者にとっては当然の責務であり、また、海外諸国のアートセンターでは舞踊作品に関するアーカイブズがコンテンポラリーダンス作家と観客にとってのベースとなっている。「舞踊学とアーカイブス」というフォーラムそのものが、舞踊研究の基礎を整えると同時に、舞踊創造に貢献する、ひとつのアーカイブ行為なのである。

終了後回収されたアンケートは5枚(7%)。舞踊におけるアーカイブスの紹介、試演について好意的な回答が多かった。